

研修医の手記

吉田 雄亮



本年度4月より市立釧路総合病院で研修をさせて頂いております吉田雄亮と申します。連携ニュースに寄稿させて頂くことができ大変光栄です。拙い文章ではありますが、読んで頂けますと幸いと存じます。

私は湖陵高校に通っていたという縁もあり、大学卒業後こうして再び釧路の地を踏み、医師としてのスタートを切りました。当院を研修病院として希望した理由としては、当院は道東医療の基幹病院であるため、プライマリケアに加え高度医療、救急医療の充実した場であるということが大きいです。また、ドクターヘリの基地病院として3次救急まで幅広く対応しており、

多くの患者さんと接することができると思っております。

まだ駆け出しで、日々学ぶべきことも多く、忙しいながらもとても充実した研修生活を送らせて頂いております。時に厳しく優しく熱心に指導して下さいる指導医の先生方や先輩医師、研修医の同輩達、そして暖かく見守り、助けて下さるコメディカルの方々に支えられ、日々働かせて頂いており、来院されている方々から多くの事を学ばせて頂いております。

若輩者ではございますが、一人の医師として、皆様から頂いたものをこの地の医療に貢献する形で返せるよう日々全力で邁進していこうと思っておりますので、今後とも何卒、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

エキスパートナース紹介

Part.8

皆様、はじめまして。がん看護専門看護師（以後OCNS）の沼田と申します。今年4月から「がん看護相談外来」で「患者さまとご家族のQOLの向上」に努めております。院内で、どのように動いているのか見えにくいのですが、一度一緒に仕事をすると癖になるかもしれません（笑）。

先日、ある方に「がん認定看護師さんですよね？」と言われました。看護の世界にはいろいろな看護師がいてよくわからないという方もいらっしゃると思いますので、はじめに専門看護師について紹介させていただきます。北海道では50名の専門看護師、そのうちOCNSは21名で、勤務地は札幌15名、北見2名、室蘭1名、伊達1名、釧路2名で、都市集中型です。役割は、①実践、②相談、③調整、④教育、⑤研究、⑥倫理の6つがあります。しかし、実際のところ、縦割りで6つの役割に分けることは大変難しいので、私は、この6つの機能を同時に使い、外来や病棟で患者さまやご家族と接しています。

次に、4月から担当している「がん看護相談外来」について紹介させていただきます。前任地で「がん看護専門外来」を担当していましたが、当院では相談室でがん相談の役割を兼ねておりますので、「相談」という言葉を入れました。当院では4月1か月で外来が8名・相談1名の9名、のべ22名が利用して下さっていました。患者さまと協働し、主に症状緩和と意思決定を支援しています。このプロセスが私を成長させてくれているといっても過言ではありません。まだまだ修行が必要ではありますが、患者さまとご家族に「生き抜く」お手伝いができればと思っております。

最後になりましたが、個人的にはたくさんの方にがんの専門看護師を目指していただきたいと思っております。そのため、個人的な進学相談や学習のプロセスについて質問や疑問などに対応したいと思っております。患者さまやご家族が意思決定できるように一緒にそのプロセスを体験してみませんか？

がん看護専門看護師 沼田 靖子



市立釧路総合病院 医療連携相談室

〒085-0822 釧路市春湖台1番12号

TEL(0154)41-6121・FAX(0154)41-6511



第15号：平成26年6月27日発行

ごあいさつ



医療連携室室長・副院長

阿部 敬

ようやく春の訪れを迎えました。ただ予報では今年は冷夏とのこと。

皆様には日頃より大変お世話になっておりまして心より感謝申し上げます。

さて、当地域におきましても医療をめぐる環境は依然として厳しいものがございまして、現場の人手不足など課題は山積しております。

このような中、医療崩壊を阻止して地域医療を守るためには、当地域全体での医療連携のさらなる充実が必須であると考えております。

当院におきましても職員一同日夜奮闘しているところですが、各機関の機能分担など現在の限られた医療資源の有効な活用に向け、皆様には今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお本号では先日発足しましたメディネットたんちょう、および連携室の体制変更などにつきましてお届け致します。

最後になりましたが皆様のご健勝とご盛業を祈念申し上げます。

理念「信頼と満足の創造」

経営方針

- 十分な説明のもとに患者様の意思を尊重し、患者様中心の医療を行います。
- 地域完結医療を目指し、高度医療・救急医療を充実します。
- 地域医療を支援するため、病診連携を密にします。
- 心温かな質の高い医療サービスを実践するため、日々研鑽します。
- 良識と協調性のある医療人として、意欲と誇りの持てる職場環境づくりに努めます。

地域医療ネットワーク(IDリンク)稼働への歩み

副院長
IT高度化検討委員会委員長 長谷川 直人



医療ネットワークとは 何のことだろうか？

4年ほど前に高平院長から医療ネットワークの担当を依頼されましたが、正直何のことかよくわかりませんでした。H22年に“地域再生臨時特例交付金”という補正予算が発令されたことで医療ネットワークを進めることになり、釧路保健所が釧路地区10病院を指定し、検討会議(部会)を発足させることになりました。

そこで実際に稼働している医療ネットワークを見学することにしました。全国的には長崎県の“あじさいネット”がすでに大がかりなネットワークを構築しておりましたが、タイミングが合わず実際に見学はできませんでした。“あじさいネット”で使用しているシステムはNEC系列の会社(SEC)の“IDリンク”ですが、その会社の本社が函館にあり、函館ではすでにネットワークが稼働しているとのことで見学することになりました。そこでは急性期病院と回復期病院の連携ツールとして活用されて、“MedIka”などとネーミングされていました。また室蘭では“SWAN ネット”、札幌では手稲溪仁会、国立札幌病院などがIDリンクを稼働させています。また、旭川地区では日赤病院が“クロスネット”として富士通のシステムによる日赤と回復期病院とのネットワークを構築しており、4月からは“たいせつ安心i医療ネット”として市中病院さらに上川地域へ拡大する予定のようです。このネットワークでは

診療録の開示が行われて、急性期病院から回復期病院へのシームレスな移行が出来上がっているようでした。

保健所主導で始まりましたが実際に運用に携わる病院側がアクションを起こさなければ話は進まないということで、H24年10月に当院に仮の事務局を設置させていただきました。ここから事務局を中心とした協議会を立ち上げるべく準備に入りました。そして採用システムを決定すべく数社のプレゼンテーション、審査会を経て全国的にも広く採用されているIDリンクを採用することになりました。現在IDリンクの参加施設は公開施設278施設を含む3415施設ということからも実績のあるシステムであることがわかります。

この医療ネットワークの仕組みはインターネット回線(VPN: Virtual Private Network)を利用して共通の形式で出力した医療情報(処方、注射、病名、画像、レポートなど)を個人ごとにID番号を結びつけることで情報の共有化を行うことであります。しかし情報は各施設の共有情報として格納されたものを参照するだけです。安全性、低コストなどのメリットがあります。

ハードが決定したことによりH25年4月に“釧路・根室地域医療情報ネットワーク協議会”を開催する運びとなりました。それまでは各病院とメンバーリストなどによる協議は行われていましたが、協議会が発足したことにより当院の連携室、システム担当を中心に規約、運用など具体的な組織作りの準備が本格的に始まりました。当院では

電子カルテの稼働準備で大変なときでしたが、補助金の運用締め切りがH26年3月に迫っていることもあり大急ぎで協議会を立ち上げ“メディネットたんちょう”の名称も決定してH26年3月より試験運用、4月には正式運用となりました。



“メディネットたんちょう”ロゴマーク

全国的に見ても情報開示病院が10施設もある医療ネットワークはあまりないようです。特に道東という広大な医療圏においてはネットワークの果

たす役割は大きなものと思われます。現状では開示病院の連携が主体となりますが、本当の意味ではクリニック、介護施設、薬局などが連携して無駄のないシームレスな医療が実現できると確信します。救急医療では患者さんより先に情報を伝えることができ、また術後、検査後、治療後のクリニックなどでのフォローアップでは急性期病院での治療内容の細かなデータの参照が可能となります。今後は多くの医療施設がネットワークへ参加していただき、単なるネット上の関係から、人と人によるヒューマンネットワークによる緊密な医療連携を構築できることを願っております。

多くの施設が参加していただき釧路地域医療ネットワークを育てていただければ幸いです。

医療連携相談室のご紹介

地域医療連携主幹 平井 裕美子

平素より連携医療機関ならびに介護・福祉関係皆様には、前方連携・後方支援にてご協力いただき感謝いたします。

当部署は平成25年4月から、医療専門職部門・医療連携相談室として独立した部署となりました。25年10月からは電子カルテ導入や釧路地域医療情報ネットワークシステムの導入・運用など目まぐるしく環境が変化した一年でした。

また、26年3月にはMSW 1名の定年退職者・1名の事務職員の退職があり大きな痛手となりましたが、今年度は看護師2名・医療ソーシャルワーカー7名 新たに臨時事務職員5名の計14名・平均年齢36歳(若干1名、50代後半がおりますが…)という若いスタッフで、つまずきながらも日々の相談や退院調整など、スタッフ全員で真摯に向き合っていきたいと考えております。

今後ともご指導のほど宜しく願いいたします。

